

2022 年 8 月

食料安全保障月報

(第 14 号)



令和 4 年 8 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 8 月食料安全保障月報（第 14 号）

目 次

概要編

I	2022 年 8 月の主な動き	1
II	2022 年 8 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報 ウクライナの穀物輸出再開と EU の穀物生産・貿易動向 （資料）	5
1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（A L I C 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は冬小麦が減少するものの春小麦が回復し前年度を上回る	
	＜カナダ＞ 生産量は回復し、前年度比 59.4% 増、過去 5 年平均比 13.3% 増	
	＜豪州＞ 生産量は前月から 3.0 百万トン上方修正され 33.0 百万トンの見込み	
	＜EU27+英国＞ EU27 の生産量は前月予測から 1.2 百万トン下方修正	
	＜中国＞ 冬小麦は収穫が終了。品質は良好。	
	＜ロシア＞ 生産量は前月から 6.5 百万トン上方修正で史上最高の 88.0 百万トン	
	＜ウクライナ＞ 4 者合意に基づく輸出再開で輸出量は 1.0 百万トン上方修正	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ 4 者合意に基づく輸出再開で輸出量は 3.5 百万トンの上方修正	
3	コメ	15
	＜米国＞ 中・短粒種は 1985/86 年度以来の歴史的低水準の生産量に	
	＜インド＞ 作付面積減少により 2015/16 年以来初の減産に	
	＜中国＞ 2022 年上半期の輸入量はインド産碎米を中心に対前年同期比 4 割増	
	＜タイ＞ 2022 年上半期の輸出量が対前年同期比 6 割増	
	＜ベトナム＞ 2021/22 年度の冬春作が低温等により減産	

II 油糧種子	
大豆	21
＜米国＞ 単収の上方修正により、生産量は史上最高、輸出減の見通し	
＜ブラジル＞ 2021/22 年度は高温・乾燥の影響で減産、輸出減の見通し	
＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続	
＜中国＞ 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し	
＜カナダ＞ 収穫面積・単収の減少により減産も、輸出量は増加見通し	
（参考1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）	27
（参考2）単位換算表	27

特別分析トピック

「我が国と世界の油脂をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：ウクライナの冬小麦の収穫（8月1日撮影）

肥料や農薬の不足で単収は前年より伸びなかったとのこと。

(概要編)

I 2022 年 8 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は収穫が終盤となり、その他の作物は成熟期を迎え、南米では今後作付けが開始される。

品目別にみると、8 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度よりわずかに増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、国際相場は 3 月には過去最高を更新した。今後も注視が必要。

また、とうもろこしについては、世界の生産量が前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：7 月）については、穀物（166→147）、植物油（212→171）、乳製品（150→146）等が下落した影響により、6 月より下落（154→141）したが、引き続き高い水準を維持（参考：前年 7 月の値は 124）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録。それ以降は下落していたが本年 2 月から上昇に転じ、直近では再び下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、8 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の8月11日報告によると、冬小麦は収穫終盤を迎え、1,540万トンの収穫となったとみられる。

とうもろこし等の夏作物は現在、開花期から成熟期を迎えているとみられる。

7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、8月には、オデーサ港等3港からの輸出が再開された。8月27日までに穀物・油糧種子が104万トン輸出された。

米国農務省（USDA）によれば、ウクライナの2022/23年度の小麦生産量は、ロシアによる侵攻の影響を受け、対前年度比41%減の1,950万トンの見通しであるが、一方、上記4者合意を受け、輸出量は前月から上方修正され、前年度対比42%減の1,100万トンの見通し。

一方、とうもろこし生産量については、7月の降雨により7月見通しから上方修正され、対前年度比29%減の3,000万トン。輸出量は小麦と同様に上方修正され、前年度対比49%減の1,250万トンの見通し。

1 ロシアの小麦生産量は史上最高の8,800万トン

ロシアの小麦は7月以降、冬小麦が収穫期を迎えている。USDAによれば、前年度と比較して冬枯れ被害が少なかったため、史上最高の8,800万トンの見通し。

穀物の輸出税については、7月に入り米ドル建てからルーブル建てに変更され、実質上ドルベースでは引き下げられたと見られる。ロシアのラブロフ外相は、7月下旬、ウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開合意に合わせ、アフリカ諸国を訪問し、エジプト向け小麦輸出を確約するなど、ロシア産小麦の輸出拡大に注力している。USDAによれば、小麦輸出量は史上最高の4,200万トンの見通し。

国連グテーレス事務総長は、ウクライナとロシアからの食料と肥料の輸出が、商品相場を落ち着かせ、消費者価格を引き下げると発言している。

2 米国のとうもろこし生産見通しは下方修正されたが、大豆生産見通しは上方修正

米国中西部における7月後半から8月前半の高温乾燥により、受粉期を迎えたとうもろこしが影響を受けた可能性もある。USDAによれば、とうもろこしの生産量は、単収の引き下げにより前月から370万トン下方修正され、3億6,470万トンの見通し。輸出量も60万トン下方修正され、6,030万トンの見通し。

一方、大豆については、収穫面積は下方修正も単収の引き上げにより、生産量は、前月から70万トン上方修正され、史上最高の1億2,330万トンの見通し。輸出量も50万トン上方修正され、5,870万トンの見通し。

3 中国南部の高温乾燥で穀物生産への影響が懸念

重慶市・江西省など中国南部では、8月に入り、1961年の観測開始以来最高の高温・乾燥が継続し、稲作（インディカ）などの生産に影響があったとみられる。中国政府は24日の常務会議で100億元（日本円でおおよそ2000億円）の追加支援を決定した。

その後、8月28日以降、重慶市等で豪雨となったが注視が必要である。

なお、吉林省や遼寧省などの東北部は降雨に恵まれ、とうもろこし、大豆、ジャポニカ米は順調に生育しているとみられる。

4 インドのコメの生産量は降雨不足で前年度比1%減の見通し

6月～7月にかけて、インド北東部のコメの主産地でモンスーンの降雨量が不足し、USDAの8月見通しによれば、コメの生産量は、7月見通しから200万トン下方修正され、前年度より1%減少の1億2,850万トンの見通し。また、小麦の生産量についても、7月見通しから300万トン下方修正され、1億300万トンの見通し。

小麦は、5月から輸出規制(輸入国の食料安全保障については配慮)を実施しているが、世界の貿易に占めるシェアは3%。一方、世界の貿易量の40%を占めるコメは、過去の豊作により在庫水準が高いため、今のところ輸出が継続されている。

(参考)ウクライナの黒海からの穀物輸出再開までの道のり

2月24日：ロシアがウクライナ侵攻。ウクライナ産穀物の黒海からの輸出が事実上停止となる。

7月22日：イスタンブールで、国連(グテーレス事務総長)、ウクライナ(インフラ省)、ロシア(国防省)、トルコ(国防省)がウクライナ産穀物の輸出再開に関する協定に署名。(ウクライナ、トルコ、国連の協定と全く同じ内容の協定をロシア、トルコ、国連が同時に締結)

<協定の内容>

- ・協定の有効期間は120日で、その後の延長が可能。
- ・オデーサ港、ユジニ港、チョルノモルシク港からの輸出が再開される。
- ・港湾における穀物の船積みには、ウクライナ、トルコ、国連の代表者が管理を行う。ロシアの代表者はウクライナの港での立ち合いは行わない。
- ・機雷が設置された海域の航行は、安全なルート地図を渡されたウクライナの船の先導により行われる。
- ・穀物輸送船は、黒海からボスポラス海峡を通過する際にはイスタンブールの「共同調整センター」(4者の代表者が参加)が通過を監視する。輸送船がウクライナに帰る際に、兵器を輸送していないことを同センターが確認する。
- ・4者は、穀物輸送に関わる商船及び港を攻撃しないことを約束する。

7月23日：ウクライナ・インフラ省傘下のウクライナ海洋港湾管理局が、穀物輸出の再開に向けて、輸送船のキャラバンを編成するので申請を行うよう呼びかけを行った。

ウクライナのクブラコフ・インフラ相は、ロシア軍によるオデーサ港の攻撃が行われたが、穀物輸出再開に向けた作業は継続すると発表。

7月24日：ウクライナ国防省によれば、破壊されたのは港湾のポンプステーション(石油関連施設)であり、穀物保管施設に被害は出なかった。

国連のグテーレス事務総長は、オデーサ港の攻撃を無条件に非難するとの声明を発表。

8月1日：トウモロコシ2万6527トンを搭載した「ラゾニ」号(シエラレオネ船籍)が、オデーサ港を出港。穀物輸出が再開。

8月27日：共同調整センターが輸出再開以降の輸出状況をまとめており、8月27日現在、輸血量は104万トン(うち、とうもろこし66万トン、小麦18万トン、ひまわり加工品13万トン、その他7万トン)。目的地はトルコ、韓国、イラン、エジプト等。

II 2022 年 8 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、7 月末、290 ドル/トン台半ばで推移。8 月に入り、ウクライナの黒海経由での輸出再開から 280 ドル/トン前後に値を下げたものの、米国のプレーンズでの高温・乾燥懸念やドル安の進行等を受け、290 ドル/トン台後半に値を上げた。8 月中旬以降、ウクライナ産穀物の輸出進展から 260 ドル/トン台後半まで値を下げたものの、とうもろこし価格の上昇に追随し値を上げ、8 月下旬現在、280 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、7 月末、240 ドル/トン台前半で推移。8 月に入り、ウクライナの黒海経由での輸出再開等から 230 ドル/トン台前半に値を下げたものの、米国中西部の高温・乾燥懸念やドル安の進行等を受け、250 ドル/トン台前半に値を上げた。8 月中旬以降、米国中西部の降雨予報やウクライナ産輸出の増加の一方、EU の高温・乾燥による作柄悪化懸念から値が上下し、8 月下旬現在、240 ドル/トン台後半で推移。

コメは、7 月末、420 ドル/トン台半ばで推移。8 月に入り、タイ国内の堅調な需要に加え、中東及びアセアン諸国からの新規需要等から、一時 450 ドル/トン台前半に値を上げたものの、パーツ安により値を下げ、8 月下旬現在、440 ドル/トン台後半で推移。

大豆は、7 月末、600 ドル/トン前後で推移。8 月に入り、米国産大豆の作柄改善等から 570 ドル/トン台前半に値を下げたものの、米国中西部の高温・乾燥懸念やドル安の進行等を受け、620 ドル/トン台後半に値を上げた。8 月中旬以降、米国中西部の降雨予報や景気減速を示す中国の経済指標発表を受けた米国産大豆の輸出抑制懸念等から値を下げ、8 月下旬現在、560 ドル/トン前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 210 万トン下方修正され 27.6 億トン。消費量は、前月予測から 300 万トン上方修正され 27.8 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 27.9%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で上方修正され、27.8 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで上方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は 8 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.5 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、19.2%となる見込み。

(注：数値は 8 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報:ウクライナの穀物輸出再開とEUの穀物生産・貿易動向

ウクライナのゼレンスキー大統領は、8月5日のスピーチで穀物の黒海からの輸出再開に関し、アジア・アフリカ諸国向けの輸出に加え、熱波の影響を受けたEU向けにも輸出が行われると発言した。国連、ロシア、トルコとの4者合意を受け再開されたウクライナの輸出動向と、高温乾燥の影響を受けて、隣接するウクライナ等からのとうもろこしの輸入拡大が予想されるEUの動向と世界の穀物貿易への影響についてまとめた。

注 文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、ウクライナの小麦は2022年7月から2023年6月。

国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 ウクライナの生産・輸出動向

(1) 生産・輸出動向

米国農務省(USDA)の2022年8月の需給見通しによれば、ウクライナの2022/23年度の小麦については、冬小麦の収穫がほぼ終了し、生産量は、ロシアの侵攻の影響を受け、史上最高であった前年度と比べて41%減の1,950万トンで前月予測から変わらず。一方、とうもろこしについては、主要産地の北部・中部で生育期の7月の降雨に恵まれ、前月から500万トン上方修正され3,000万トンの見通し。

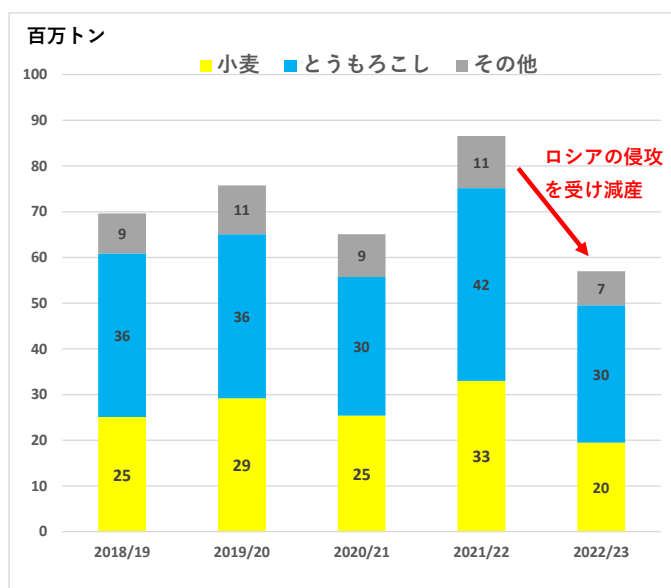
輸出については、7月22日、イスタンブールにて、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物のオデーサ港を含む3港からの輸出再開に合意した。これを受け、小麦は、前月予測より100万トン上方修正され1,100万トン、とうもろこしも350万トン上方修正され1,250万トンの見通し。いずれも前年度を大きく下回る。

(2) 今後の見通しと国際相場への影響

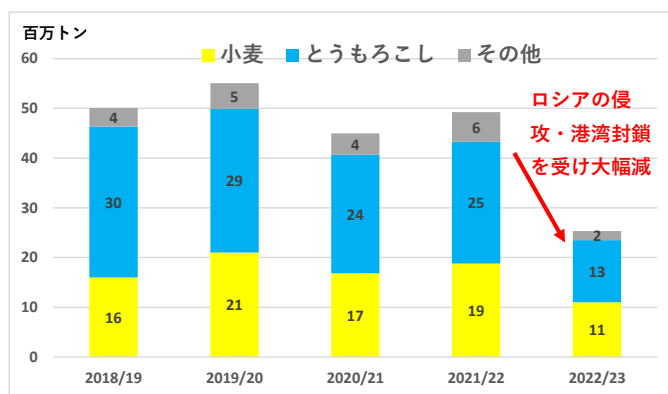
4者合意の翌日の7月23日にはロシアからオデーサ港への攻撃があり、輸出再開が危ぶまれたが、8月1日以降、オデーサ港などからの輸出が順次再開された。イスタンブールの共同調整センターによる確認を経て、8月8日には、最初の船が目的地のトルコに到着し、8月27日までにトルコや韓国、イラン等向け計104万トンの穀物・油糧種子が輸出された。

シカゴの小麦相場は、2月24日のロシアによる侵攻等を背景に大きく上昇し、3月7日には史上最高値(14.25ドル/ブッシェル)を更新したが、その後下落し、今般の4者合意を受け、8月下旬にはロシアの侵攻前の水準の7ドル台後半(期近物)まで下落している。

図1 ウクライナの穀物の生産・輸出見通しの推移
(1) 生産量



(2) 輸出量



出典: 米国農務省 「PS&D」(2022.8)

2 EUの生産と貿易動向

(1) 天候状況

EU 域内では 7 月に入り、各地で 40 度を超える気温を記録するなど高温・乾燥となった。

フランスでは、ボルヌ首相が、「フランス史上、もっとも過酷な干ばつに見舞われている」と発表した。ほぼ全土で、水使用制限が課されており、農業用水も使用を制限されている。フランス気象庁によると、7 月は過去 60 年の間で、最も降水量が少なく乾燥していた。

イタリア北部でも 70 年ぶりの干ばつとなっている。ポー川の水位が低下し、アドリア海からの逆流が懸念されている。

ドイツでも、ライン川の水位が低下し舟運に影響が出るほどの乾燥となっている。

今回の歴史的な高温・乾燥により、特にとうもろこしなどの夏作物の生産への影響があったとみられる。8 月中旬には降雨があったものの、生育状況の改善には遅かったとみられる。

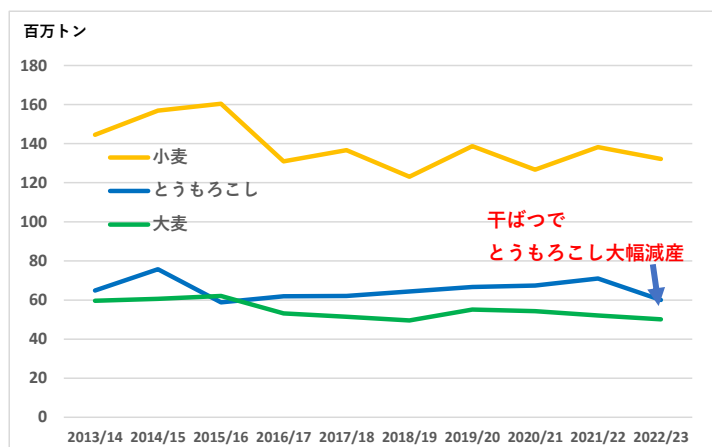
(2) 小麦

USDA によると、7 月の高温乾燥の影響を受け、生産量は 7 月見通しから 200 万トン下方修正され、前年度比 4 % 減の 1 億 3,210 万トンの見通し。収穫は 7 月時点でほぼ終了している。

国別では、ルーマニアで前年度 (1,100 万トン) から 210 万トン減産となり 890 万トン、スペインも前年度 (680 万トン) から 60 万トン減産となり 620 万トンとなっている。

輸出量は、減産の影響を受け、前月から 200 万トン下方修正され 3,350 万トンの見通し。

図 2 EU の小麦、とうもろこし、大麦の生産量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 8)

図 3 欧州の 8 月前半の土壌水分量の平年対比(JASMAI より)
ドイツからフランスにかけて土壌水分が少ない(赤丸)

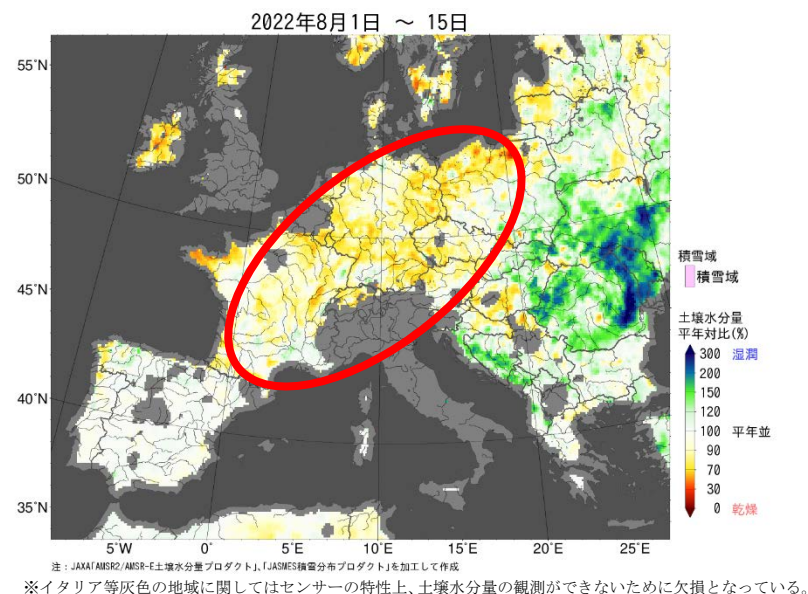
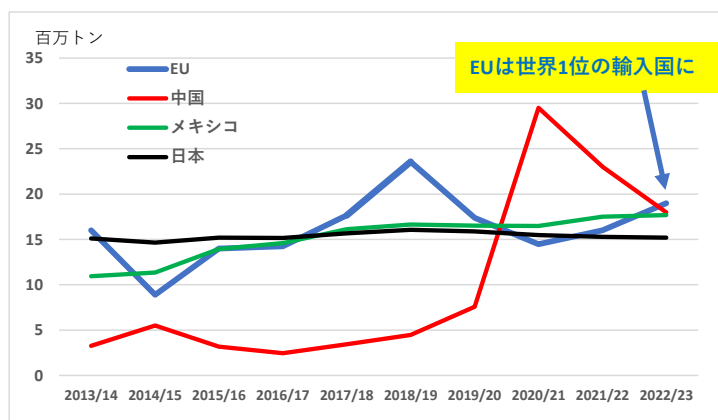


図 4 主要とうもろこし輸入国の輸入量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 8)

(3) とうもろこし

生産量は、7月の高温乾燥の影響を受け、7月見通しから800万トン下方修正され、前年度比15%減の6,000万トンとなる見通し。

7月時点で収穫が終盤または終了していた小麦と異なり、とうもろこしは、作柄決定に大きな影響を与える受粉期に高温・乾燥であったため、生産量への影響が大きいとみられる。国別ではフランス、ルーマニア、ハンガリー、イタリアでの影響があったとみられる。

EUは、従来からとうもろこしの不足分をウクライナ等から輸入していたが、今般の減産を受け、輸入量は、300万トン上方修正され1,900万トンとなり、前月まで世界1位の輸入国であった中国(1,800万トン)を上回り、メキシコ(1,770万トン)も抜き、世界最大の輸入国(地域)となる見通し。

写真 乾燥の影響を受けたフランスのとうもろこし圃場
降水量が少なく生育状況は悪い (7月30日撮影)



3 世界の穀物貿易への影響

(1) 小麦

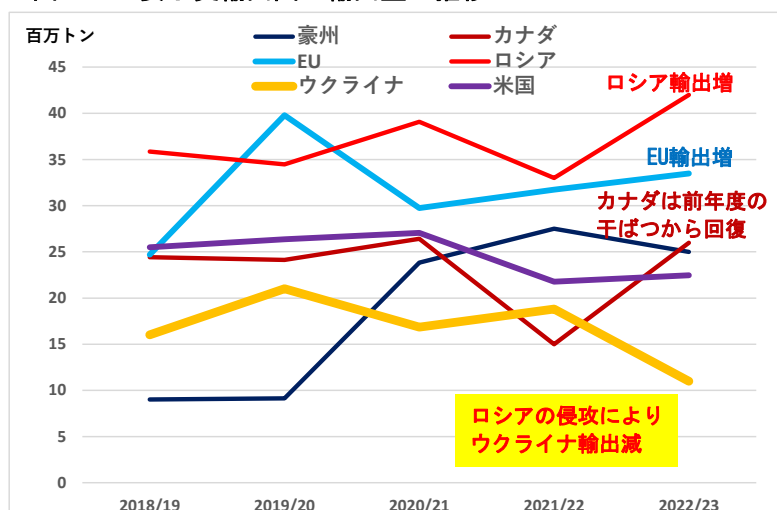
ウクライナの穀物輸出再開に向け、4者合意を受けて、ウクライナの穀物輸出が再開され、輸出見通しも上方修正されたが、前年度を大きく下回っている。

EU産は、今回の高温乾燥の影響を受け生産量・輸出量とも下方修正されたが、輸出量は前年度より増加が見込まれている。

ロシア産は、史上最高の豊作が見込まれており、対露経済制裁を行っていない中東、アフリカ諸国向けの輸出が拡大すると見られている。7月下旬のウクライナの穀物輸出再開の4者合意に合わせ、ロシア産穀物や肥料の輸出確保についても合意されたといわれている。ロシアのラブロフ外相は7月下旬に、エジプト、エチオピアなどアフリカ諸国を訪問し、穀物輸出拡大に努めている。

輸出が伸び悩んでいる米国では冬小麦の収穫が開始され、今後新穀の輸出が開始されるとみられる。前年度干ばつであったカナダ産も豊作が見込まれるとともに、豪州は3年連続豊作が見込まれている。なお、豪州産穀物輸出に関するサプライチェーンの状況については、ロシアの増産や米国、カナダの生産・輸出状況も見つつ、引き続き注視が必要である。

図5 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」(2022. 8)

(2) とうもろこし

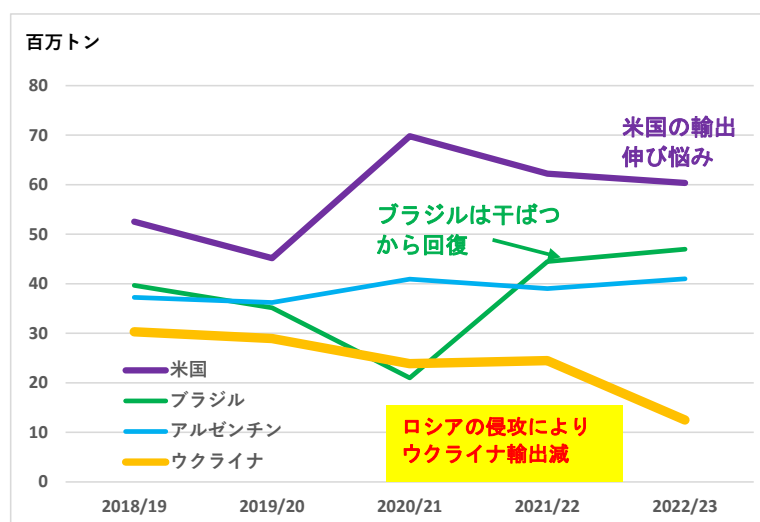
ウクライナに関しては、小麦同様、4者合意により輸出が再開されているが、輸出量は前年度を大きく下回っている。8月の輸出先をみると、トルコやイラン向けが多くを占めるものの、EUや英国など欧州向けも含まれている。

一方で、冬とうもろこしの収穫が終盤を迎え、これから輸出が開始される2021/22年度のブラジル産は史上最高の生産量（前年度比33%増の1億1,600万トン）となり、それに伴い輸出量も史上最高の4,450万トン

（前年度比2.1倍）となる見込み。なお、EUは、減産に伴いブラジル産の輸入を増加させる可能性があるとする業界関係者もいる。

なお、これまでウクライナ産を輸入していた中国は、当面は米国産を手当てしている模様である。ただし、米国産は、作付面積減に加え、受粉期の乾燥により単収が低下すると見られ、前年度より減産となると見込まれている。中国はすでにブラジル産の輸入について検疫問題に関し5月に合意していることから、遺伝子組換えの承認関係がクリアされればブラジル産の輸入も開始される可能性もある。今後、各国の需要がブラジル産に集中する可能性もあり、引き続き注視していく。

図6 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移

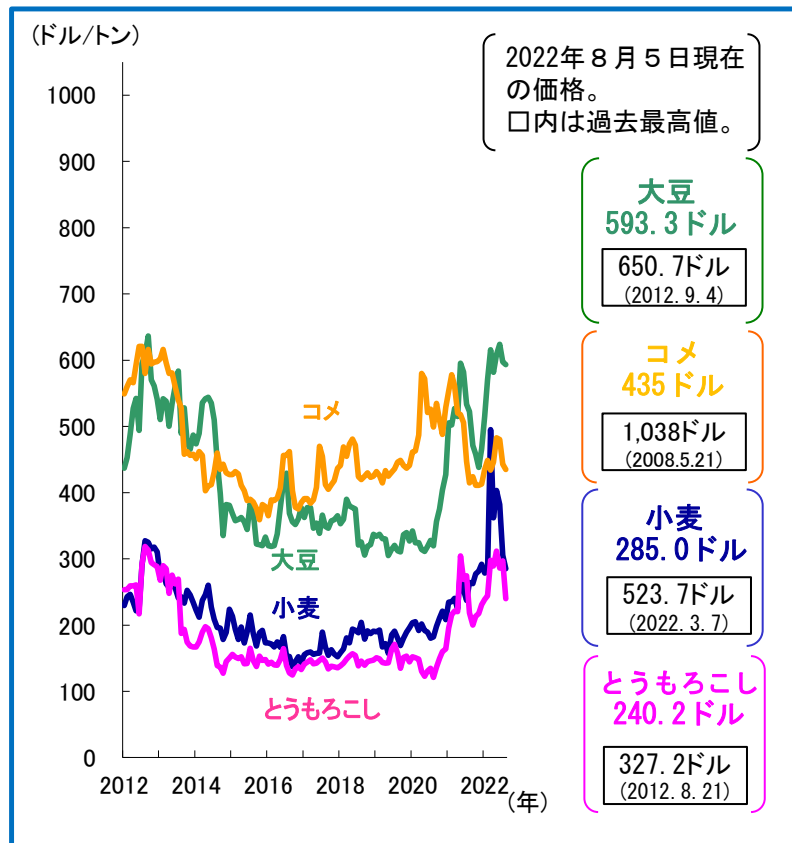
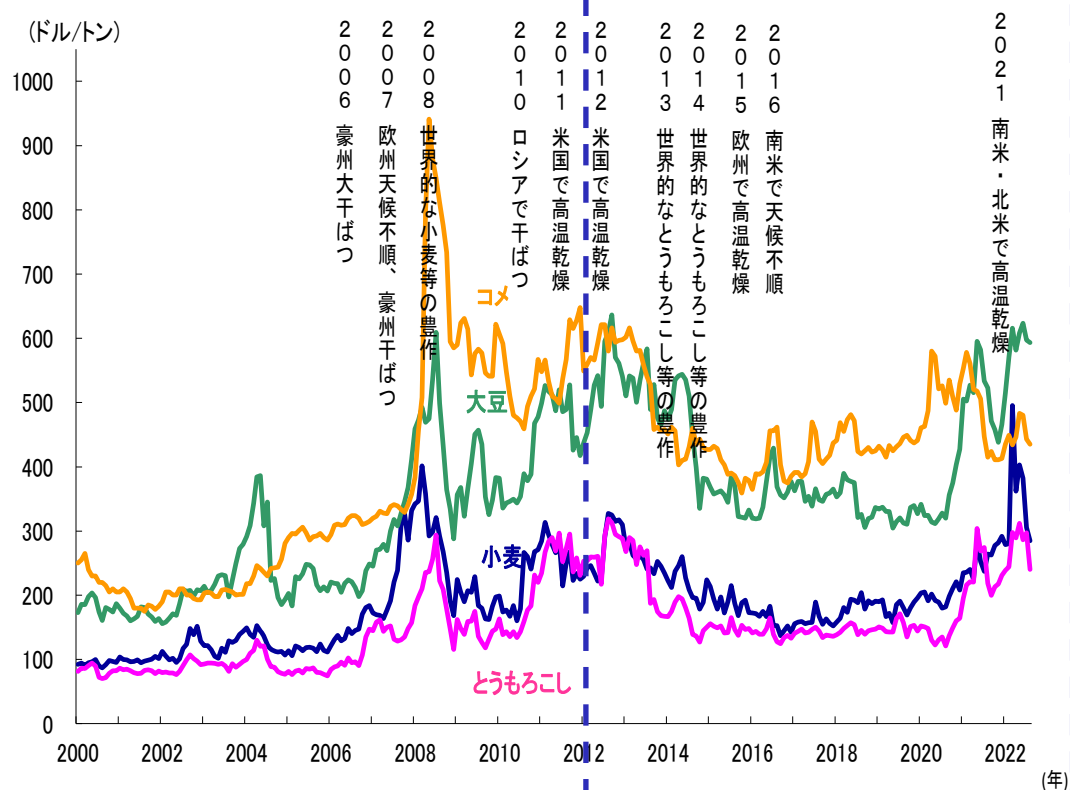


出典：米国農務省 「PS&D」(2022.8)

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



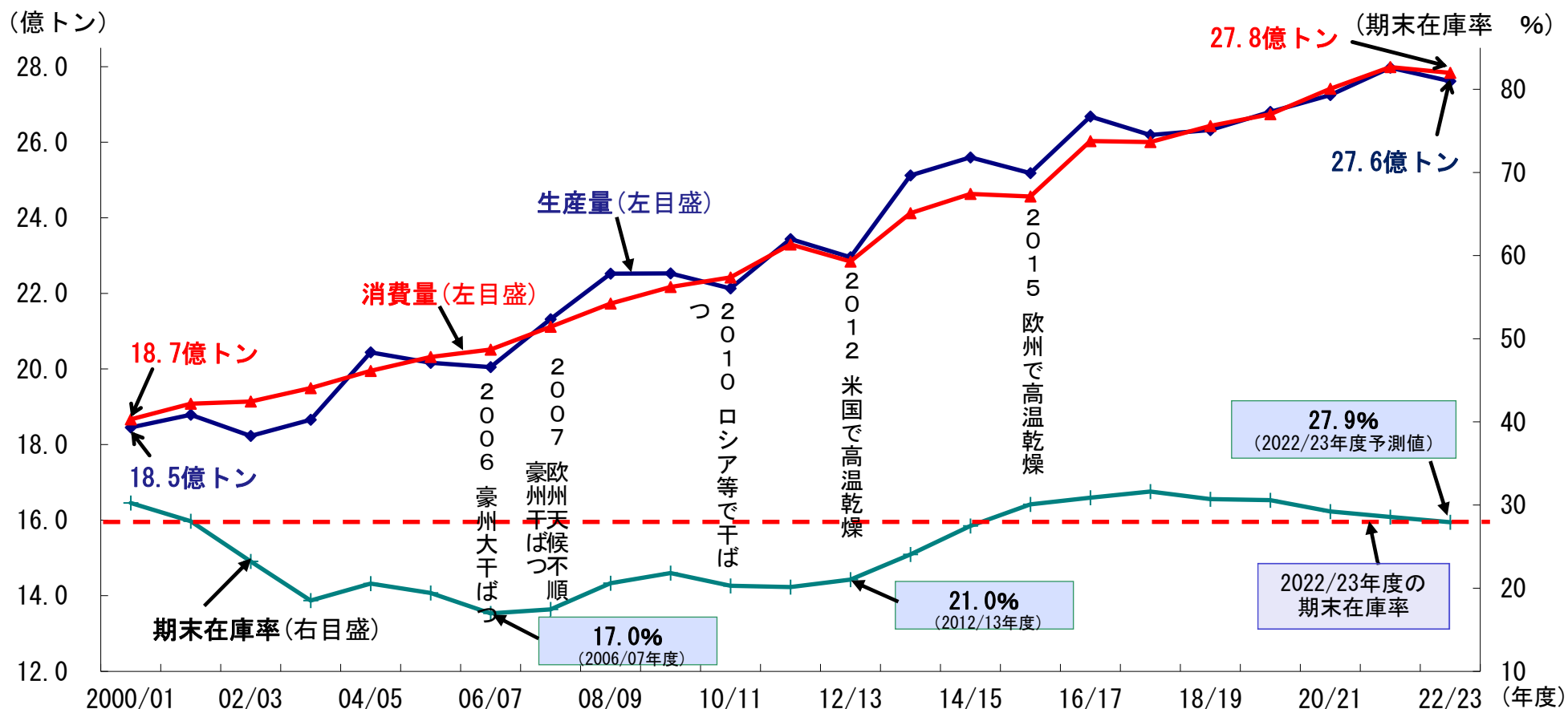
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、コメの2022年8月5日現在の価格は、8月3日の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.9%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

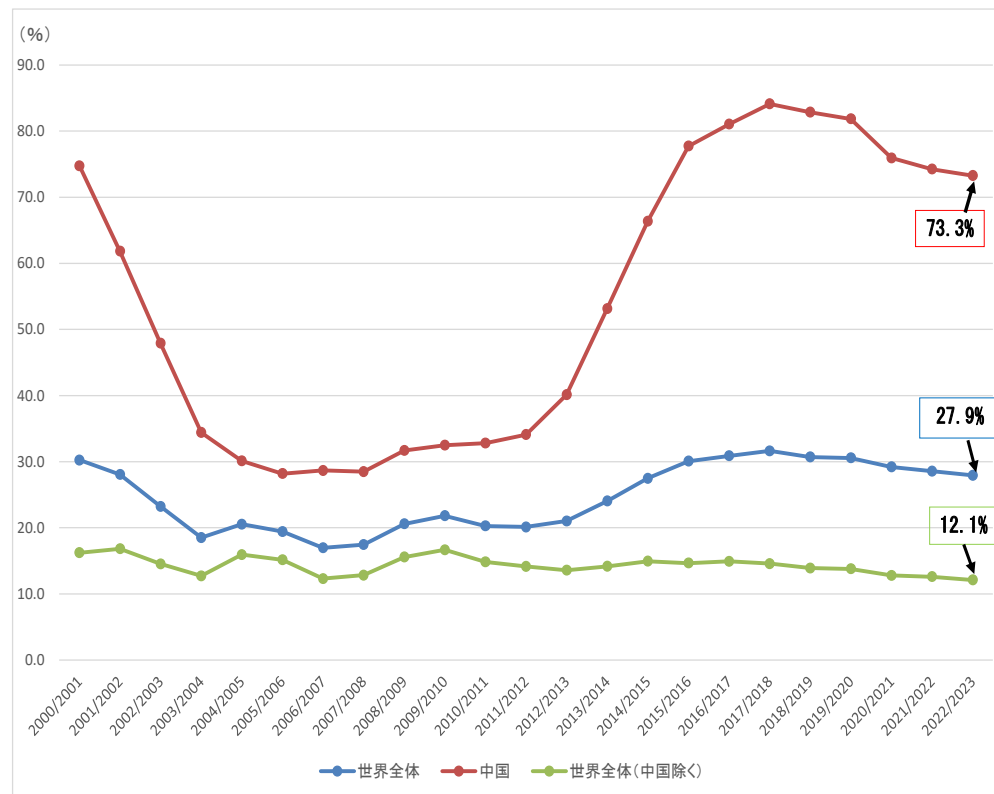


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (August 2022)、「PS&D」

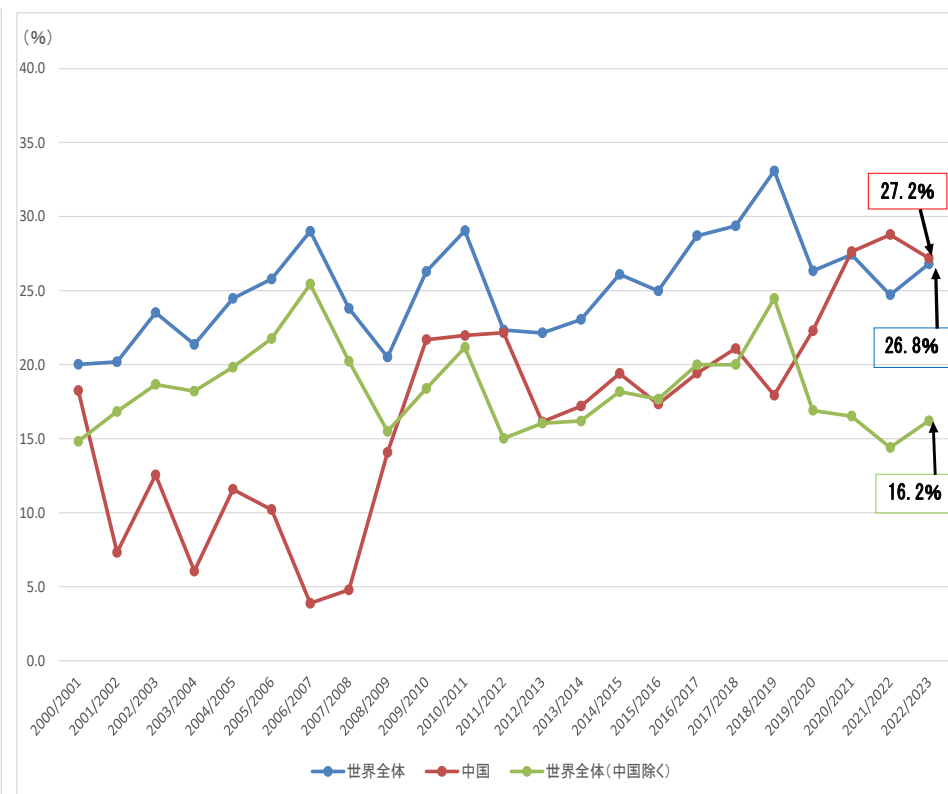
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(August 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

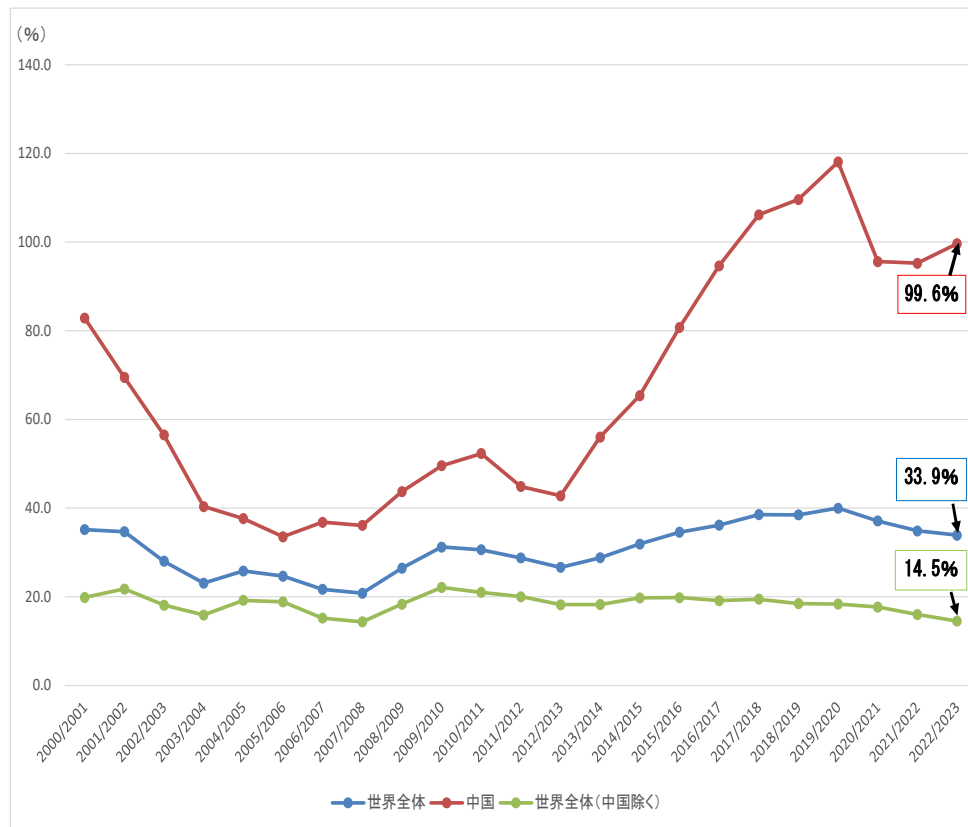
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

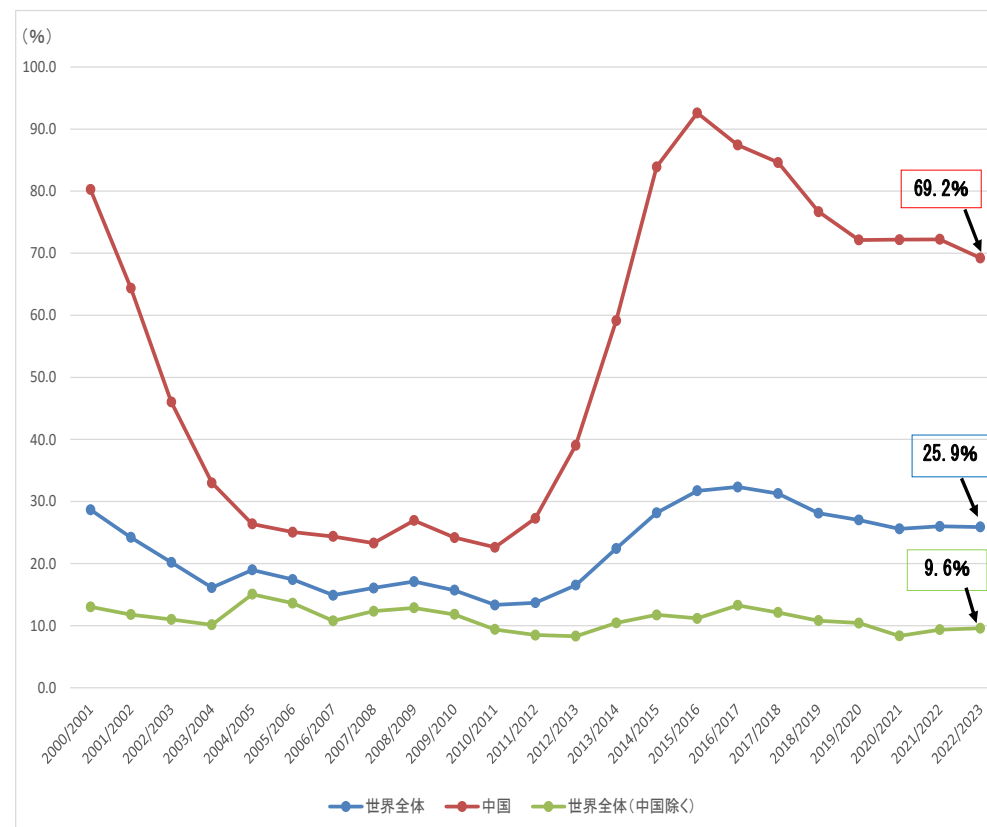
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(August 12, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

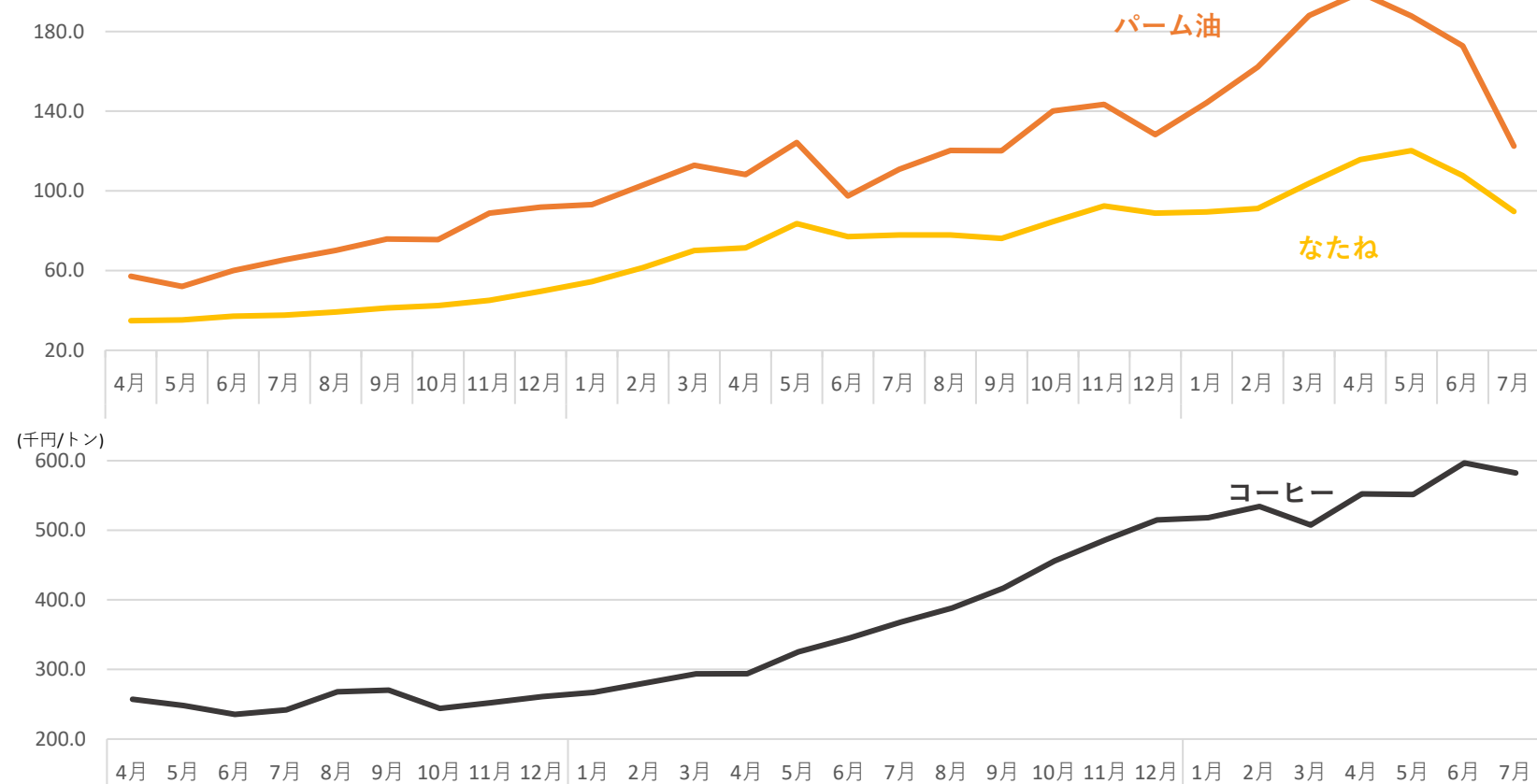
3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（５月２３日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

(千円/トン)



2022年8月20日現在
□内は2020年4月以降の最高値。

パーム油
122.4千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
89.6千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

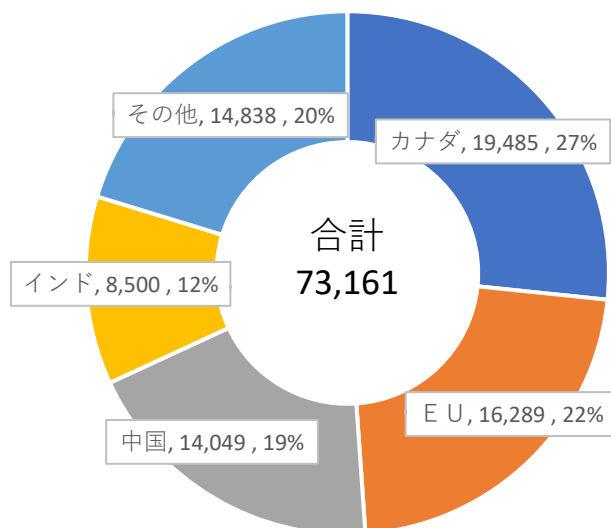
コーヒー
582.3千円/トン
596.8千円/トン
(2022.6)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

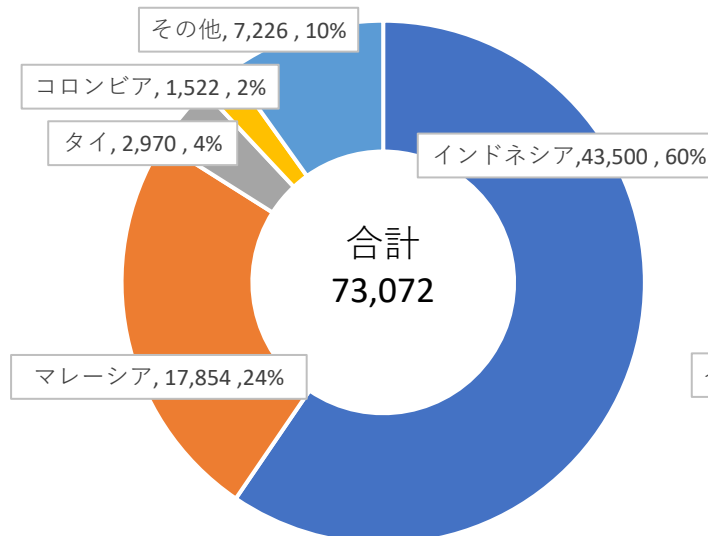
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



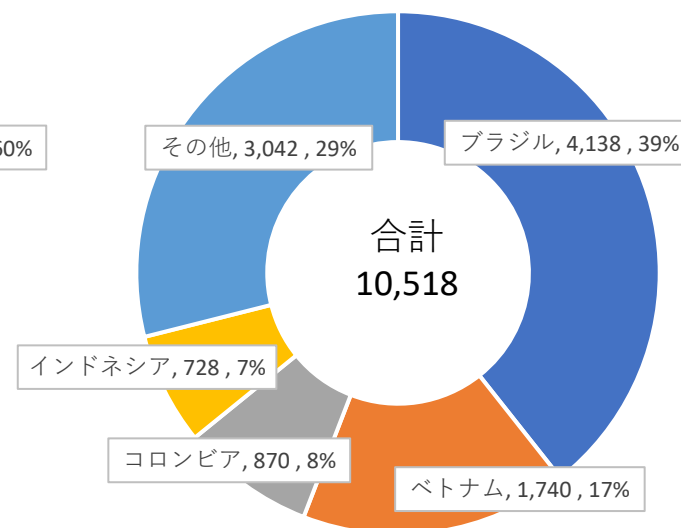
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
コーヒ一	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年7月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.1～145.8（前年同月比で－0.9%～40.3%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年2月～令和4年7月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	2月	3月	4月	5月	6月	7月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	107.1	107.2	108.0	107.5	107.9	111.9	12.6%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.9	100.9	100.1	100.1	110.0	113.7	13.3%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.1	102.9	103.1	104.0	104.7	104.9	3.8%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	128.4	132.2	134.8	135.4	139.2	145.8	40.3%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	99.0	99.9	100.7	101.0	99.8	99.9	0.3%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	113.3	120.3	123.9	126.1	125.0	125.2	15.3%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	100.2	99.3	103.0	105.3	104.0	106.2	7.6%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.9	99.7	99.1	99.5	99.3	99.1	-0.9%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	101.5	101.9	102.4	102.6	103.2	103.8	3.7%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年2月～令和4年8月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4									
品目	平均	平均	平均	平均	平均	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	105.3	104.6	105.1	104.6	105.9	109.8	111.1	1.2%	13.9%	
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	98.4	99.0	99.0	99.0	110.0	111.2	111.2	0.0%	12.3%	
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	101.1	102.0	101.6	102.4	102.9	103.3	103.7	0.4%	2.6%	
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	122.9	126.4	129.6	130.8	132.7	139.1	148.3	6.6%	39.8%	
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	98.1	98.4	99.0	99.6	98.8	99.8	100.4	0.6%	1.4%	
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	105.9	112.1	117.2	117.2	118.3	117.2	118.3	0.9%	11.7%	
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	98.6	98.6	105.0	104.5	105.0	105.0	104.5	-0.5%	5.4%	
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.7	99.3	99.3	99.3	99.0	99.3	0.3%	-0.2%	

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年9月号（8月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）干ばつなどによる牛群の縮小により牛の供給はひっ迫予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002347.html

（EU）飼料費の高騰などから2022年1～5月の牛肉生産量は前年同期並み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002365.html

（豪州）牛肉輸出量、低迷も2カ月連続で前年同月比増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002366.html

（NZ）2021/22年度の牛肉生産量、輸出量ともに前年度を下回る見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002367.html

（アルゼンチン）2022年1～6月の牛肉輸出量、前年同期をわずかに上回って推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002368.html

◆豚肉

（メキシコ）2022年の豚肉生産量、前年比6.4%増の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002369.html

（ブラジル）2021年の豚肉輸出量は4年連続の増加、22年は減少傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002370.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）チーズの輸出好調、5月は過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002371.html

（EU）生乳取引価格は引き続き過去最高値を更新

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002372.html

（NZ）乳製品輸出量は減少も、世界的需要の高まりから輸出額は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002373.html

（中国）主要乳製品輸入量、全品目で減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002374.html

◆飼料穀物

（世界）2022/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度並みの見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002351.html

（世界）米国の下方修正も、南米での生産回復などで大豆の期末在庫は大幅増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002375.html

（米国）2022/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は10%台の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002376.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002377.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.8)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等